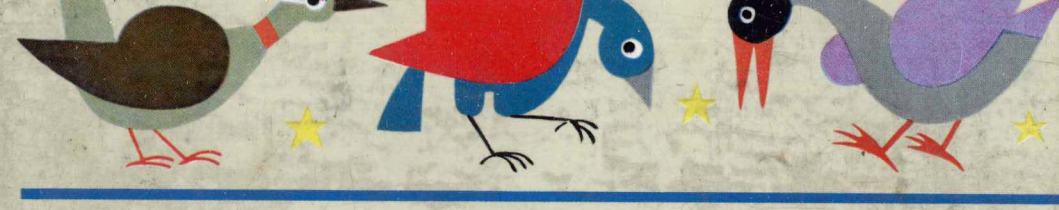
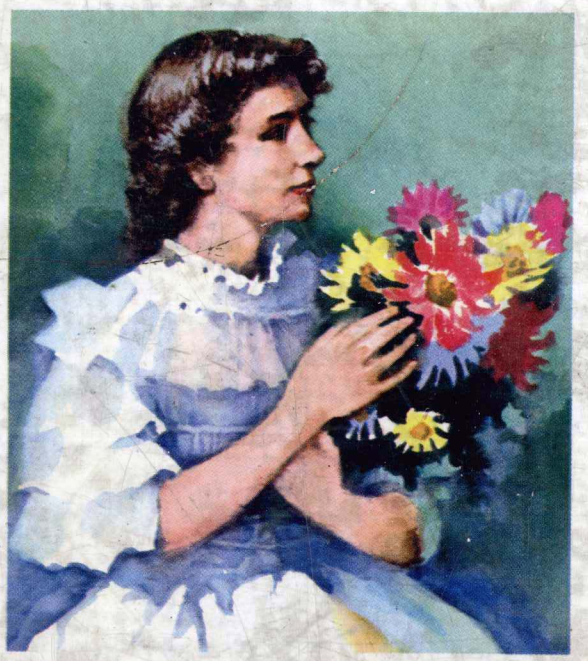
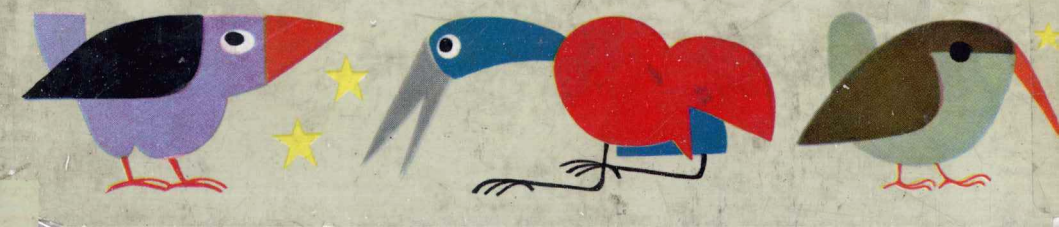


ヘレン・ケラー

■はなわ ほきいち ■みやぎ みちお



母と子の世界偉人物語 12



ヘレン・ケラー

■塙保己一（はなわほきいち）
■宮城道雄（みやぎみちお）

母と子の世界偉人物語 12

盲目の世界に光を掲げた人

N.D.C. 289
小学館　昭和42年
192P・23cm

筆者略歴

宮脇　紀雄　1907年生。岡山県出身。
唐沢　道隆　1912年生。奈良県出身。
戸川　菊枝　1904年生。神奈川県出身。
古賀亜十夫　1912年生。佐賀県出身。
大日方　明　1902年生。兵庫県出身。
井口　文秀　1909年生。富山県出身。1925年小学館絵画賞受賞。

昭和四十二年五月五日　初版発行
昭和四十六年三月十五日　六版発行
母と子の世界偉人物語　第十二巻
ヘレン・ケラー
塙保己一／宮城道雄
定価二九〇円
発行人　相賀徹夫
印刷所　東京都文京区小石川四ノ十四ノ十二　共同印刷株式会社
発行所　株式会社　小学館　東京都千代田区一ツ橋二ノ一
郵便番号　一〇一
電話　東京(263)二一一一
振替　東京　二〇〇番
造本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。
Printed in Japan　Syōgakukan　凸版製本
8323-209012-3068

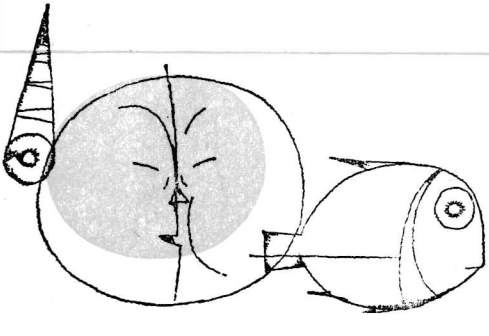
はじめの　ことば

もし、テレビや、美しい　けしきが、見えなかったり、たのしい音楽が　聞こえなかったり、おかあさんや　お友だちと　話す　ことも　できなかったら、どうでしょうか。きっと　みなさんは、つまらなく　なり、生きて　いく　ことさえ、いやに　なって　しまうかも　しれませんね。でも　みなさんは、毎日　いろんな　ものを　見たり、聞いたり、話したりする　ことが　できるでしょう。それだけでも　たいへん　しあわせな　ことなのです。

この　本には、ヘレン・ケラー、塙保己一、宮城道雄の　三人の　お話を　のせました。三人は　おさない　ころから、めくらに　なり、なにも　見えなく　なって　しまったのです。けれども、そうした　ふこうや　かなしみにも　まけず、どりょくに　どりょくを　かさねて、りっぱな　しごとを　やりとげました。

この　本には、その　三人が　どのように　苦しみに　たえ、目が　見える　人いじょうの　すぐれた　しごとを　のこしたかが　書かれて　あります。どうか　みなさんも　たくさんの　ことを　まなびとって　ください。

宮脇紀雄

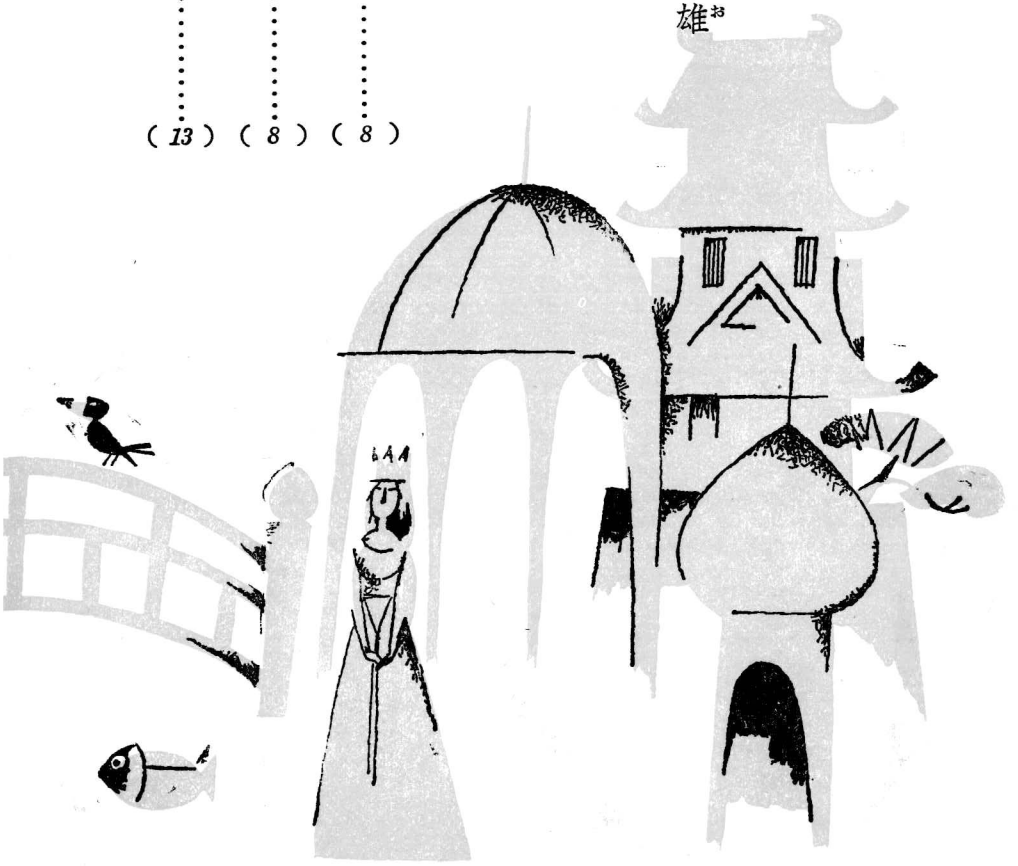


ヘレン・ケラー

塙保己一　宮城道雄

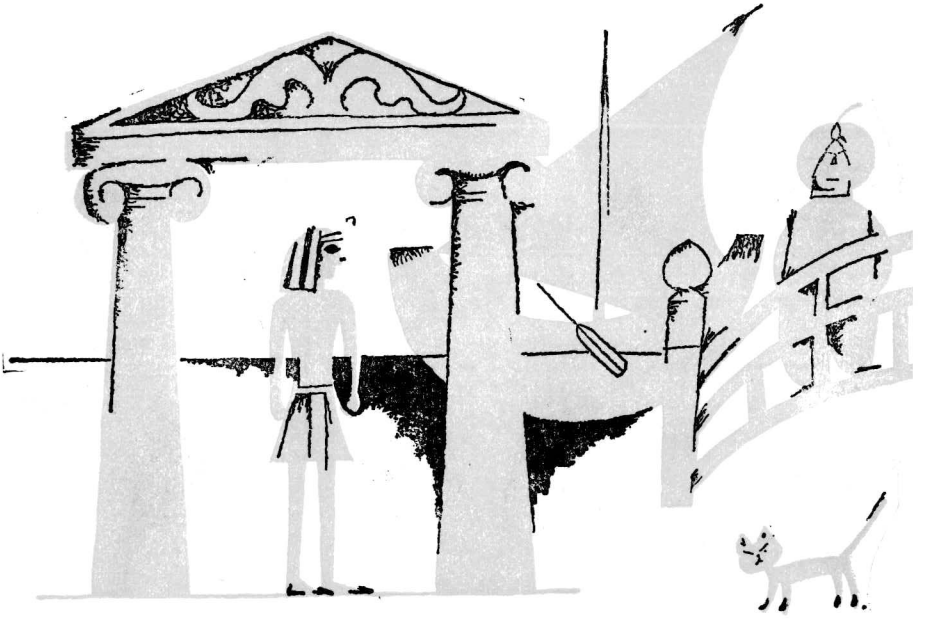
もくじ

ヘレン・ケラー……（8）
かわいい　女の子……（8）
重い　病気に……（13）

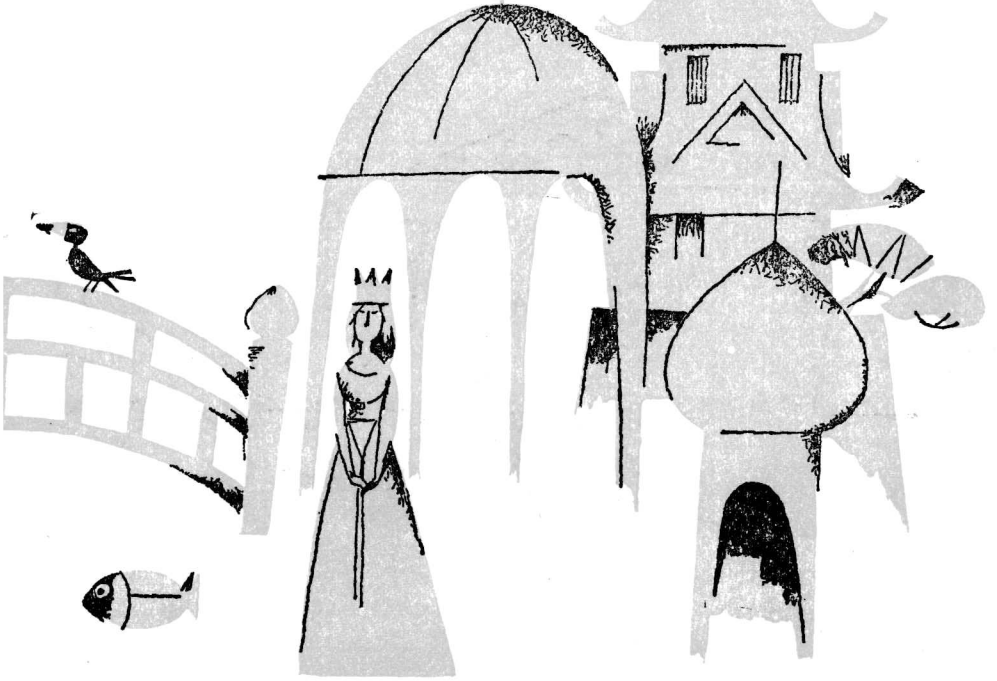


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

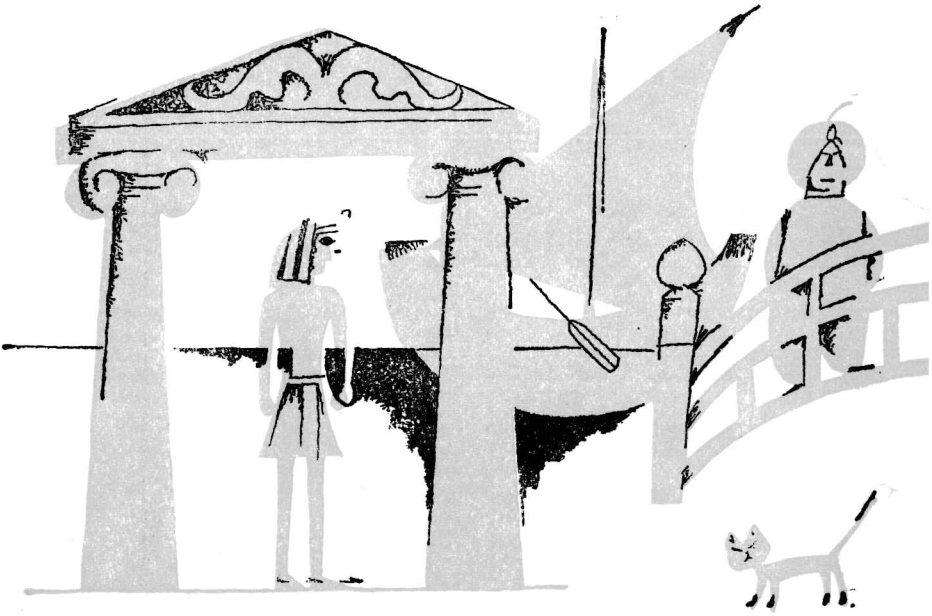
目も　耳も　口も……（20）
すばらしい　役者……（27）
かみの毛を　切る……（33）
いたずらっ子……（40）
ゆうめいな　いしゃ……（48）
サリバン先生……（54）
コップを　なげる……（60）
しぜんと　いう　もの……（68）



もう　ひとつの　目……（75）
ハーバード大学へ……（82）
一生の　しごと……（88）
日本へ　三度も……（94）
塙　保己一……（100）
かんの　やまい……（100）
目は　見えなくても……（110）
しんせつな　人たち……（122）

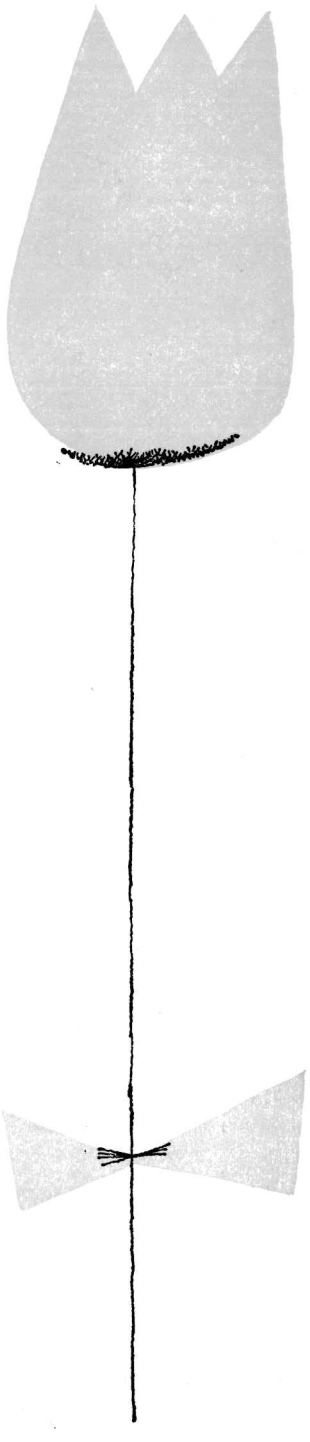


ふ自由な　目あき……（132）
宮城道雄……（144）
学校へ　行きたい……（144）
どうしても　なおらない　目……（154）
ぼくにも　ピアノが　ひける……（160）
きびしい　ことの　おけいこ……（171）
新しい　きょくを　作る……（177）
解説　忍耐と努力の奇跡……村岡花子（184）



執筆者

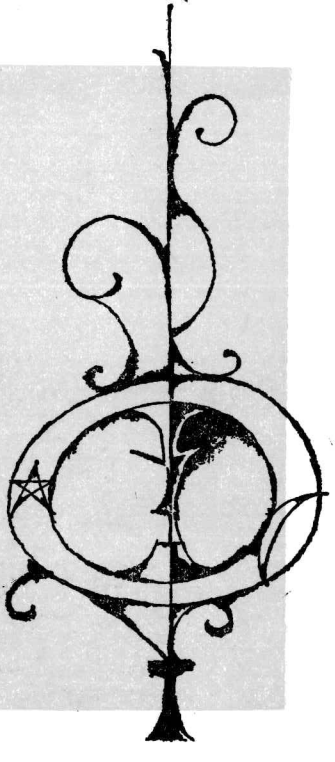
深沢邦朗（装丁）
若菜珪（装丁）
鈴木琢磨（装丁）
宮脇紀雄（文）
唐沢道隆（文）
戸川菊枝（文）
古賀亜十夫（え）
大日方明（え）
井口文秀（え）
村岡花子（解説）



ヘレン・ケラー

塙　保己一
宮城道雄

目の見えること、耳が聞こえること、口で話ができること。こうしたことが、どんなにすばらしいことか、もういちど考えてみましょう。



ヘレン・ケラー

宮脇紀雄・文
古賀亜十夫・え

かわいい　女の子

アメリカの　南東の　ほうに、タスカンビアと　いう　小さい　町が　あります。

この　町で、『ケラーやしき』と　いえば、むかしから　つづいて　いる、ゆうめいな　家でした。

一八八〇年　六月二十七日、この　家に、かわいい　女の　赤ちゃんが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

生まれました。

「よかったな、女の子で。」

「ほんとに……ひとり　女の子が、ほしい　ほしいと　思っていましたわ。」

この　家には、男の子しか　おりませんでした。そこへ　はじめて、女の子が　生まれたのです。おとうさん、おかあさんの　よろこびようは　たいへんな　ものでした。

「この　子が　しあわせに　なるように、いい　名を　つけて

やらなければ。」
と、おとうさんと　おかあさんは、いろいろと
そうだんしました。
そう　して　けっきょく、おばあ
さんの　名まえを　もらって、『ヘ
レン・ケラー』と　つけられたので
した。
かわいい　赤ちゃんの　ヘレンは、
おとうさん　おかあさんに、目の　中に
いれても　いたく　ないほど、だいじに　して
そだてられました。いい　うばも　やとわれました。

赤ちゃんは、ぶじに 元気で、大きく なりました。そうして、よちよち 歩きが できるように なりました。

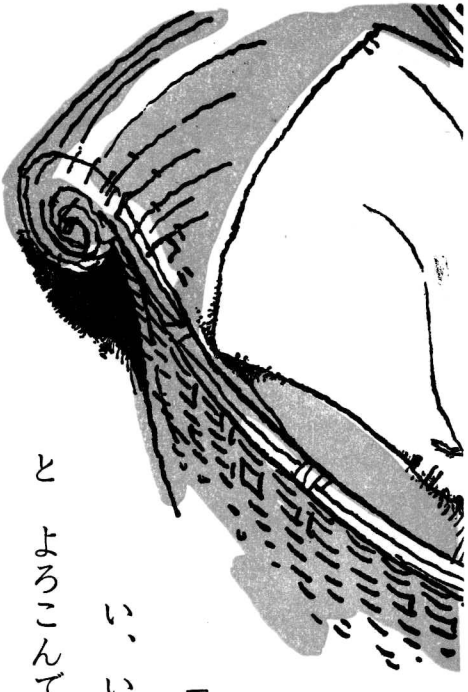
「おじょうちゃん、いらっしゃい。」

と うばが、ヘレンを にわへ つれて 出て、手を さしのべると、よちよちと ヘレンは、そちらへ歩いて 行きます。それは、ほんとうに、お人ぎょうのように かわいいすがたでした。

にわの 花だんには、いろいろな 花が さき、日の 光は 明るく さしか

だれからもかわいがられ、しあわせに育っていくヘレンの、おませで元気なようすを明るく楽しそうに読んでください。

かり、ヘレンは　しあわせな　赤ちゃんです。
小さいけれども、なかなか　きかんぼうで、人の　する
ことは　なんでも　やって　みなければ　しょうちしません。
とても　おませで、生まれて　半年も　たつと、もう　む
じゃきな　かたことで、
「こんにちわ。」
と、人の　顔を　見ると、あいさつした
り　しました。
「まあ、おりこうさんだこと。」
そう　いって、だれでも　おど
ろきました。



おとうさんと おかあさんは、目を ほそくして、

「この ぶんなら、きっと かしこい、いい 子に なるだろう。」

と よろこんで、いっそう かわいがって そだてて いました。

すると とつぜん、思いも かけない ことが おこって しまったのです。

重い 病気に

一八八一年 九月の ある 日の こと、ヘレンが 生まれて、十五か月

たって いました。

その 日、空は なまり色に くもって、日も ささない、暗い いやな 日でした。

「あら、どう したのかしら……。」

思わず、おかあさんが さけびました。

「だれか 来て。ヘレンが ヘレンが……。」

さっきまで、おもちゃの 犬と いっしょに、きげん よく 遊んで いた ヘレンが、ふと見ると、ゆかに すわりこんで 目を つりあげ、苦しげに あえいで いるのです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com